

復員後の略歴

昭和二十五年一月

休職中の川井営林署に復職

以来 盛・久慈・一関・大船渡
の各営林署に勤務

五十八年三月

定年退職

六十一年四月

岩手県大船渡振興局農林部非常
勤職員

平成五年六月

非常勤職員退職

現在の様子

健康の維持に努めながら畑を耕
作して自家用野菜を栽培

家族構成

老妻と二人の生活 子供は娘二
人ともに結婚して別居

(岩手県 田辺 壮久)

セルロバヤ収容所で

岩手県 橋本達夫

昭和二十年八月という年月は、当時の全国民にとっ

て一生忘れ得ぬ出来事であった。もちろん今後とも絶対にあってはならないし、忘れてもいけない。それは五十二年前になる第二次世界大戦による日本国の敗戦であった。長い年月のことなので忘れているのも当然かもしれない。しかしその戦後処理の中で私には忘れられない出来事がある。

昭和二十年八月九日、ソ連軍の侵入時、旧満州国に関東軍として（資料によれば）二十五個師団、十個の独混旅団、総兵力七十五万とある。ただ、その内容については、小銃・銃剣さえもない部隊というありさまだったという。

戦争の悲劇については数多くの戦記の中で述べられているが、満州第百七師団について、八月十五日の終戦も知らず八月二十九日の武装解除まで戦った師団を次のように指摘している。いったい満州百七師団とは何であつたろうか。満州、内蒙古、外蒙古の三国の境にあって、ソ連に近い興安嶺に駐在し万一のソ連軍の侵攻に備える人垣である。日本の戦史は、「南方ガダルカナルをはじめ軍部の誤まれる判断と無能な作戦に

よって多くの兵員を失った。百七師団も例外でなく、この矛盾をもろに受けた犠牲は非常に大きく、まさに関東軍いや帝国陸軍から北辺の山中に棄てられた悲劇の兵団である」と述べている。

かくて我が百七師団第一七七連隊（満州第二〇一部隊）も例外でなく、同様に戦いが続いたのである。師団として約二、〇〇〇人ほどの戦死者を出し、満州の荒野に屍をいまださらしている。さらにはシベリアに強制抑留され、また三、〇〇〇人ほど尊い命が今もシベリアの地に葬られていることを思えば、なんとかしなければいけない呵責の念にうたれる。

かくして、ソ連の命令により入ソに先だって作業大隊が編成され昭和二十年十月十五日満州国齊々哈爾出發、ときに一、五〇〇人の兵員が有蓋貨車に詰め込まれ輸送の間、食糧の供給が悪いため腹痛、下痢などの患者が続出し、停車中などは周り一面トイレの状態となっていた。

十月二十八日、シベリアに入ってから二つか三つ目の駅に下車、一〇軒ほど歩いてセルロバヤ収容所（当時

ハタブラーク）に強制収容されたのである。

途中ハイラルにて三人加わり入所人員一、五〇三人になっている。この収容所は編成時第二十四収容所（チタ州チタ市）第十二分所（チタ州ボルジャ市）に位置している。兵員一、五〇三人の部隊別内訳を見ると、一七七連隊が一、〇〇〇人、一〇七挺進隊二〇〇人、一〇七通信隊二〇〇人、師団司令部他一〇三人であることも後でわかった。

私が特に忘れないで書きたいところは、この収容所は、元々は、独ソ戦争苦戦のためソ連国内において経済的にも苦しく、特に労働者の不足も加わって休山になり、廃鉱同然の状態であったタングステン鉱山で、以前は囚人受刑地にもなっていたように聞いている。

宿舎の建物も丸太を積み重ねた古いもので、トイレその他の施設もなく、周囲には鉄条網をめぐらして、四方角に昼夜監視兵が立って、ものものしい警戒ぶりである。鉱山の設備も悪く、特にコンプレッサ故障、坑木なども腐れ、いまにも崩れるようだ。横坑は氷になって一メートル程にも達し全面的に結氷している。

最初の作業はその水を砕いて搬出することから始まったが、空気が薄く倒れる者まで出たのである。そのほかに夜間は駅に行つて貨車の積みおろし作業もあり、空腹と酷寒との戦いでもあった。一カ月程で各収容所にそれぞれ転出もあつてか、気がついたときには五〇〇人の転出で残った者は一、〇〇〇人になっていた。

入所当時は、先の戦闘のための一般的な身体の衰弱に加えて、零下三〇〜四〇度もあり毎日の食料も極端に悪く、一食当たり黒パンはタバコ二個分の大きさ、それにスープ（米のおかゆ等）が飯盒の蓋一杯分程度であつた。しかも作業は重労働である。

食料の分配のときはすごかつた。これが日本人かと思つた。全員立ち会ひのもとに黒パン一個を数人で分けるのに厚いの薄いのとか、塩味だけのスープをスプーン一杯分多いの少ないの、目の色を変えての騒ぎである。人のことより自分の命である。その分配の姿はまるで地獄だと思つた。しかし誰がこれを責めることが出来るであらうか。

収容所内の掃除はカチンカチンに凍つた汚物の処理

であつたが、ツルハシや鉄棒で砕くと破片が顔にあたり、顔の熱でとけてどうにもやりきれなかつた。ある時は虱が猛烈な勢いで繁殖して、夜、体の中を這いまわつて寝られたものではない。たった一着の軍服が作業衣であり、普段着であり、そして寝具でもあつた。その衣服という衣服に虱の卵が真つ白く付着していた。

シベリアの冬は夜が長く寒さが厳しかったため、外套、帽子、手袋など防寒具のすべてを身につけて寝たが、空腹と虱、そして将来の不安が交錯してなかなか眠れない。このような生活も長く続くわけがなく、敗戦の年の十二月も過ぎ去り二十一年を迎えたあたりから病死者が急に多くなり、日毎に増加し一日にして三〇人程にもなつたように記憶している。

遂にとどめを刺される瞬間がやつて来た。食糧の中の塩分が不足となり、皆の顔は一樣に青白くなり下半身が特にだるくなつてくる。階段を上るにも足が持ち上がらなくなつたり、空腹に絶えかねて水ばかり飲む。下痢症状をおさめようとしても薬がないので、皆ベーチカに這い寄り白樺の消し炭を食つて口の周囲を真黒

にして息絶える者、発狂して自分の大小便をほおぼって死んでいった者、まさに阿鼻地獄が展開された。最後のとどめになったのは回帰熱の集団発生で、虱が媒体となって蔓延し九割以上の者がかかった。これは熱病で四〇度以上が長く続くため、そのまま息絶えて死んでいったのである。

少しでも動ける者たちが各々ベッドを回り、死んでいる者を探した。死んでいるのか生きているのか分からない。特に上段ベッドは生死が不明のため、木刀のようなもので足をたたいて少しでも動いていれば生きていると判断したのである。

死んだ者は直ちに全裸にして死体集積室に入れて置く。見る見るうちに多くなっていく。シベリアの冬は真に冷凍庫のようなもので、冷凍人間になるので少なくとも五月頃まで保存できる。最悪の事態は一月であった。死亡率五割に達していた。このときに幸いにも関係者の努力もあってか、海拉爾^{ハルビン}陸軍病院から榎哲夫軍医中佐が大量の薬品サルバルサンを持参し療養に努められ、このお陰をもってかろうじて全員死亡の難をま

ぬがれたのである。もちろん私もその一人である。

すべての調査資料にあるように、この收容所についてはどうも異常に感じざるを得ない。第一に、全員で一、〇〇〇人のうち、約半数の四八一人が死亡、二月に二四一人を最高に一月〜三月の間に集中していること。第二に、埋葬地も単独一カ所で四八一人である。

第三に、この埋葬地が現在タングステン鉱山で露天掘りのため、廃土石の山の下になっていて遺骨収集も困難と思われる。

おそまきながら虱の撲滅運動が展開され、陰毛の剃毛や熱気消毒室も作られ、虱も卵から消滅していった。かくして入所して初めて経験したシベリアの飢餓と酷寒と奴隸的労働に耐え、死の谷間をさ迷いつつ奇跡的に生きながらえた。

恐怖の冬は過ぎシベリアにも春がやってきた。生き残った者たちのうち、比較的丈夫な者から順次、四八一人の屍の埋葬作業にかけた。運搬は荷車で五体くらいずつと、墓穴は三〇センチも掘れば精一杯で、凍土になっているため当時の体力では限界であった。そ

れでも塔婆がわりに残材に消し炭で名前を記入し、それぞれ読経を上げできるだけの手は尽くしたのである。こんなつらい最期を目の当たりにして思えば、気持ちの治まるところを知らない。その後六月から最後の二十三年八月の間病死者も少なく、概して生活や労働条件も逐次改善され、二十二年五月には収容所内にも浴室、洗場、便所、理髪室などがそれなりに整備され、生活にもいくぶん余裕ができてきた。

そして次に、ダモイデモクラシーとも言うべきか、『日本新聞』、壁新聞の発行や夕食後の民主学校開校など、いろいろの啓蒙活動の強化、あるいは指導者が中央での教育を終えてラーゲル内に配置され、次第に権力を握るようになり、反動者にはそれぞれ罰則が科せられたりして兵隊も恐れた。

『日本新聞』のニュースにも引揚げ輸送が再開された記事もあり、帰国ができるのでは……?と思うようになって明るさも次第に増してきた。遂に帰るときがきたのである。昭和二十三年八月二十五日、第二十四収容所（チタ州チタ市）第十二分所（チタ州ボルジャ

市、セルロバヤ）、当時日本側は通称ハタブラークと呼んでおり、その後の調査の結果セルロバヤと改められてはいるが、閉所となっている。その後二、三カ月後には故国日本に帰国している。

収容所を去るとき意外にも旅愁を感じたり、ナホトカに着いて海を見たときには、この海の彼岸が故国日本であるのだとか海岸に降り立って感慨にひたり、復員船に乗れば日本のどこの港に無事に着くだろうとか、ようやくここまで生きながらえてきたことに神よ!!といった思いであった。船の上から日本の島々の緑を見たときには感無量で、まさに「国破れて山河在り」の心境であった。

ロシアの辺境といわれるシベリアの奥地に送った三年の月日の中で、人間が極限の状況に置かれたときのエゴイズムの醜さを痛感し、人間という動物であるのだとさえ思えた。今、五十二年前の記憶をよみがえらせようとしても、時、所、人の細部はすっかり薄れ、あの時々の痛切な思いはとも再現できない。ほとんどが死に、かろうじて生きて帰った者たちはその苦し

さ、そのつらさを表現できるものではない。極端に言えば、死んでシベリアの地にいまだに眠っている者たちだけが苛酷さを語れるのではなからうか。

光陰矢のごとし、五十余年を経た現在、約五、〇〇〇人の遺骨を持ち帰っていると聞いている。これ以上の先送りはできない。残る六万余の遺骨が一日も早く帰国できることを心から祈る。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十四年三月三十一日

本籍地 岩手県紫波郡紫波町彦部字後庵九十八番地

現住所 岩手県盛岡市西青山三丁目十七番二十五号

略 歴

昭和十五年十二月 岩手県立盛岡農学校卒業（戦時

中のため繰上げ三年制）

昭和十六年十二月 岩手県立六原青年道場農村指導

員養成所終了（一年制）

昭和十七年四月 岩手県農業会技手

昭和二十年二月 現役兵として第五十七連隊に入

営（弘前）

満州五又溝歩兵第一七七連隊第

一大隊本部転属

昭和二十三年五月 ソ連ロシア共和国チタ州セルロ

バヤより舞鶴に復員

昭和二十三年八月 彦部村農業委員会に復職

昭和二十四年一月 農林省岩手作物報告事務所勤務

昭和五十八年四月 東北農政局岩手統計情報事務所

退職

昭和五十八年八月 第一〇七師団二〇一部隊戦友会

岩手連絡会結成

平成五年七月 シベリア慰霊訪問に参加

平成六年十月 岩手県シベリア抑留平和祈念慰

霊碑建立事業に参加

平成八年九月 ソ連抑留中死亡者埋葬地調査に

参加

中央慰霊祭（九段会館）に毎年参加

岩手県慰霊事業実行委員として慰霊祭の開催等に尽力している。

家族構成

妻、長男夫婦、孫娘、計五人

(岩手県 田辺 壮久)

私の抑留生活

岩手県 佐藤 竹男

私の抑留生活は横道河子から始まったと言える。牡丹江の部隊を未明に撤収（退却）し、夜が明けると間もなくソ連機の機銃掃射の波状攻撃を受け、部隊は蜘蛛の子を散らすように大隊編成の隊列が中隊規模に、小隊規模に、またそれが分隊に、さらに三々五々に、まさに敗残兵となり、路上や山野に屍をさらす戦友たちを何人も目撃した。

この時点で大隊長や中隊長、小隊長からの指揮命令は届かなくなり、私たちは銃だけは手放さず、おもしろいにも三人五人と組み線路沿いを逃げた。私たち敗残兵はハルビンへ向かった。関東軍はハルビンに集結してソ連軍に大攻撃をかけるということであった。今

思うと単なる噂かソ連軍の諜報活動ではなかったかと思う。

途中鉄橋が爆破され首まで水につかったりしながらたどり着いた所は横道河子であった。ここでの生活は短かった（二―三日くらい）。三々五々になった関東軍（敗残兵）を編成しなおすだけであった。小さな部屋に十人二十人とすし詰めで暮らしたのである。しかしここでの生活は初年兵時代とは全く変わり、ピンタはなくなり私達はのんびりとした生活を送った。

ここでは日本とソ連は停戦協定が成立して一週間、十日間くらいでウラジオストクから帰国できるとの話で持ち切りであった。しかし帰国「ダモイ」はこの日から死語となり、昭和二十三年秋に引揚船山澄丸に乗船するまでソ連に騙され続けた。

横道河子での生活も短く、ある日一日がかりで私たちの部隊（石井大隊）は移動した。もちろん徒歩であった。そこは旧関東軍のある輜重部隊の兵舎であった。ここでも短い生活だったが、横道河子よりさらに私たちにとってはのんびりした生活であった。この兵舎に